

## 『社会言語科学』特集論文の募集のお知らせ

学会誌編集委員会では、特集「敬語研究のフロンティア」の論文を募集します。特集に投稿された論文は、通常の投稿論文と同じく、査読を経て掲載が決定されます。

特集の原稿の執筆、投稿方法などは通常の投稿論文と同じですが、2007年7月20日付けで投稿規定・執筆要項が改訂されています。投稿規定・執筆要項ともに大幅に変更されていますので、新しい規定に沿って投稿してください。

なお、特集では最終投稿期限が設定されていますのでご注意ください。論文は基本的に投稿され次第、査読作業に入ります。したがって、より早く投稿された論文ほど、査読が早く済み、論文を修正する機会が多くなります。最終投稿期限は特集の投稿を受け付ける最終期限という意味ですので、早く投稿できる方は早めに投稿されることを勧めます。刊行時期までに採用とならないときは、特集号以外の号に掲載されることもありますのでご了解ください。

特集論文の最終投稿期限：2007年12月26日（水） [郵送の場合消印有効]

掲載号の発行：2008年9月（第11巻1号に掲載予定）

特集論文の投稿先：

E-mail：edit06@jass.ne.jp

郵送：〒153-8902 東京都目黒区駒場3-8-1 東京大学大学院総合文化研究科  
社会言語科学会編集委員会委員長 生越直樹

\*投稿に際しては、メールの件名あるいは封筒の表に「特集投稿論文」と明記してください。

[特集の趣旨]

### 特集「敬語研究のフロンティア」

特集号エディター：吉岡泰夫・井上史雄・小磯花絵

この特集では、研究対象の「敬語」を広く捉える。「待遇表現」や「ポライトネス・ストラテジー」はもちろんのこと、「パラ言語情報」や「非言語行動」で伝えられる広い意味での敬語・敬語行動を含む。言語も日本語に限らず、様々な言語を対象とし、広義の敬語およびポライトネス・ストラテジーの対照研究も歓迎したい。

調査研究や実験の分野・方法・観点も広く捉える。二つの意味で「研究のフロンティア」を目指す意欲作が投稿されることを期待する。一つは、未開拓の分野の、あるいは未開拓の方法・観点による探索的研究である。いま一つは最先端という意味での何らかの先進性や可能性を備えている研究である。例えば、アプローチが先進的とか、調査研究法が他に類を見ないとか、常に変化し続ける敬語・敬語行動・敬語意識の最先端を捉えるとか、様々な方向が考えられる。

ポライトネス理論を応用して敬語行動にアプローチする研究も、5年前の特集「言語の

対人関係機能と敬語」から大きく発展している。研究の対象とするポライトネス・ストラテジーも広がり、それを捉える方法や観点も進化している。調査のフィールドも、行政や医療などの公共性をもつコミュニケーションの現場が新たに開拓されている。この分野では、例えば、患者と医師の間でラポールを築くのに効果的なポライトネス・ストラテジーといった、医療の質を高めるのに役立つ研究も考えられる。

そのほか、経済学や経営学の観点から敬語にアプローチする研究もあるだろう。企業の接客や営業活動において敬語が重要視されていることから、「敬語の経済学」という分野が登場しても不思議ではない。例えば、社員教育において敬語の研修に投じられているコストは日本全体でどの程度なのか。また、テレビ CM や顧客への手紙などで間違った敬語を用いた場合に送り手の企業が受ける打撃は、金銭で見積もるとどのくらいなのか。

さらに、記憶・思考・脳の分野からの寄与も期待される。ヒトが自然に習得する敬語の知識は、頭で覚える種類のもの（宣言的記憶）なのか、それとも身体が覚える技能のようなもの（手続き的記憶）なのか。場面に応じた敬語やポライトネス・ストラテジーの使い分けは、その背後で思考や推論が大きな役割を果たしていると思われるが、いったいどのようなメカニズムが働いているのか。そして、敬語の記憶や思考は脳のどの部位が関与しているのか。これらの問いは、脳研究者や心理学者の眼にも魅力的に映るであろう。たとえ具体的なデータ収集がまだ開始されていない段階であったとしても、有用なヒントや斬新なアイデアをショートノートなどで示そうとする野心的な論考を歓迎したい。

大規模コーパスを活用した広い意味での敬語研究も、まさにフロンティアである。近年、「日本語話し言葉コーパス (CSJ)」など、大規模な書き言葉・話し言葉のコーパスが整備されるようになり、コーパスを活用した広い意味での敬語研究の可能性も開けてきた。例えばコーパスを利用することによって、トピックの違いや発話の場の改まり度の違いが敬語行動に及ぼす影響、書き手・話し手属性と敬語使用の関係、待遇表現の使用状況と読み手・聴き手の印象との関係、通時コーパスを活用した敬語史の記述など、様々な角度から敬語・敬語行動を捉えることが可能となるだろう。また、敬語研究に有効なコーパスのあり方の研究、といった探索的研究も歓迎したい。

調査研究法が他に類を見ないという点では、同一地点で、ある一定期間において変化を探る経年調査法に基づく敬語行動、敬語観、敬語意識の研究がある。方言敬語を含めた敬語と敬語意識の経年変化を社会変動と関連付けて捉える研究、敬語に対する意見、敬語知識、敬語についての規範意識などの経年変化を捉える研究、などが考えられる。経年調査法に基づいた敬語研究を展望し、その可能性を探る、といった論考も歓迎したい。

そのほか、予想もしなかった「敬語研究のフロンティア」の投稿を期待する。会員のみなさんの積極的な投稿をお願いしたい。